

緩和ケアだより

松江市立病院 緩和ケア病棟広報誌

2025
vol.
39


20th
Anniversary
特別号

 松江市立病院 緩和ケア病棟

題字デザイン：Katsuto Nagira

緩和ケア病棟の理念

緩和ケアとは、苦痛の緩和を必要とする悪性疾患の患者とその家族のQOL（人生と生活の質）を改善することです。

当院緩和ケア病棟では、患者やその家族の想いを可能な限り尊重し、その人らしい生活を送ることができるように、さまざまな専門家とボランティアがチームとして支えます。

基本方針

1. 痛みやその他の苦痛となる症状を緩和します。
2. 患者さんがその人らしく生きることができるように支えます。
3. 無理な延命や意図的に死を招くことはしません。
4. 病気の早い段階から適用し、積極的な治療に伴って生ずる苦痛にも専門性をもって対処します。
5. 患者さんの希望に沿い、在宅への支援を行ないます。
6. 患者さんの療養中から死別した後に至るまで、家族が様々な困難に対処できるように支えます。



CONTENTS

●巻頭	久留 一郎病院長	1
●メッセージ	安部 睦美 緩和ケアセンター長	2
●メッセージ	中右 礼子 科長、小糠 あや 病棟長	3
●メッセージ	看護師長、副看護師長	4
●メッセージ	スタッフ（コメディカル・ボランティア含む）	5～6
●行事		7～8
●徒然日記		9
●編集後記		10





松江市立病院
病院管理者・病院長

久留 一郎

緩和ケア病棟 開棟20周年に寄せて

このたび、緩和ケア病棟が開棟20周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。2005年、当院が現在の田和山に新築移転した際に緩和ケア病棟が開設され、それにあわせて「緩和ケアだより」の発刊も始まりました。翌2006年にはがん対策基本法が制定され、がん医療を取り巻く社会的環境が大きく変化しました。その中で、「すべてのがん患者とその家族の苦痛を軽減し、療養生活の質を高め、安心して暮らせる社会を実現する」という目標が掲げられました。当院では、急性期・高度急性期医療を担いながら、地域がん診療連携拠点病院としての役割も果たし、診療体制の整備と発展に努めてまいりました。そうした中、松江医療圏で唯一の緩和ケア病棟として、宍道湖や田和山遺跡を望む穏やかな環境の中で、スタッフの皆さまが20年にわたり献身的に取り組まれてきたことに、心から敬意を表します。今回、この記念に際し、これまでの「緩和ケアだより」を改めて読み返す中で、患者さんやご家族と病棟スタッフとの深い交流、数々のエピソードが綴られており、20年間にわたる歩みに深く感動いたしました。そして同時に、これからの未来に向けて、病棟が果たすべき役割と課題について病院管理者として改めて考えさせられました。

緩和ケア病棟は「最期の場所」ではありません。10周年の際に安部睦美先生が寄せられた文章の中に、「最期の瞬間をどう迎えるかではなく、それまでをどう生きるかを支えることが緩和ケアの神髄である」と記された一節が心に残っています。「生きることを支える病棟」であること、そしてその延長として「終の住処」となる場所であるという考え方は、これからも医療者の方に是非認識して頂きたいです。歴代のスタッフの皆さまは、「病棟の質を高めることが松江圏域全体の緩和ケアの普及につながる」という信念のもと、実践を

通じて地域に大きな影響を与えてこられました。その取り組みは、医療者に対する啓発としても極めて意義深いものです。今後も「緩和ケア病棟は最期の場所ではない」というメッセージを広く伝え、誤解を解いていく努力を、皆さまと共に進めていきたいと考えています。

環境面の整備も緩和ケアにおいてはとても重要です。ナイチンゲールはその著書『看護覚え書』において、「病人の苦しみの原因は病気そのものだけでなく、環境や心の不安、尊厳の喪失にある」と述べています。彼女は戦地の中で、患者がその人らしく安心して過ごせる環境こそが回復につながると気づき、それを“看護”と呼ぶことを提唱しました。現代においてもその本質は変わることなく、緩和ケア病棟では特に重要であると考えます。患者さんやご家族が心穏やかに過ごすことができるよう、空気清浄や照明など、病院の環境整備に一層努めてまいりたいと思います。

医療スタッフの育成とストレスマネジメントは、持続可能な病棟運営には欠かせません。真に有能な医療人は、使命感を持ち、絶えず成長を続ける努力ができる人間でなければなりません。緩和ケアの現場では、高度な専門性と感情労働が求められ、スタッフの疲弊も大きくなりがちですが、同時にやりがいや誇りを感じられる職場であることが働く意欲につながると信じています。スタッフの精神的なストレスを軽減しながら医師を含むチーム全体で質の高いケアを提供し続けるために、教育と育成に今後も協力してまいります。

結びに、20年の歩みに深く感謝を申し上げますとともに、次の10年、20年に向けて、緩和ケア病棟がさらに発展し、地域に安心と希望を届ける場であり続けられるよう、共に取り組んでまいりましょう。



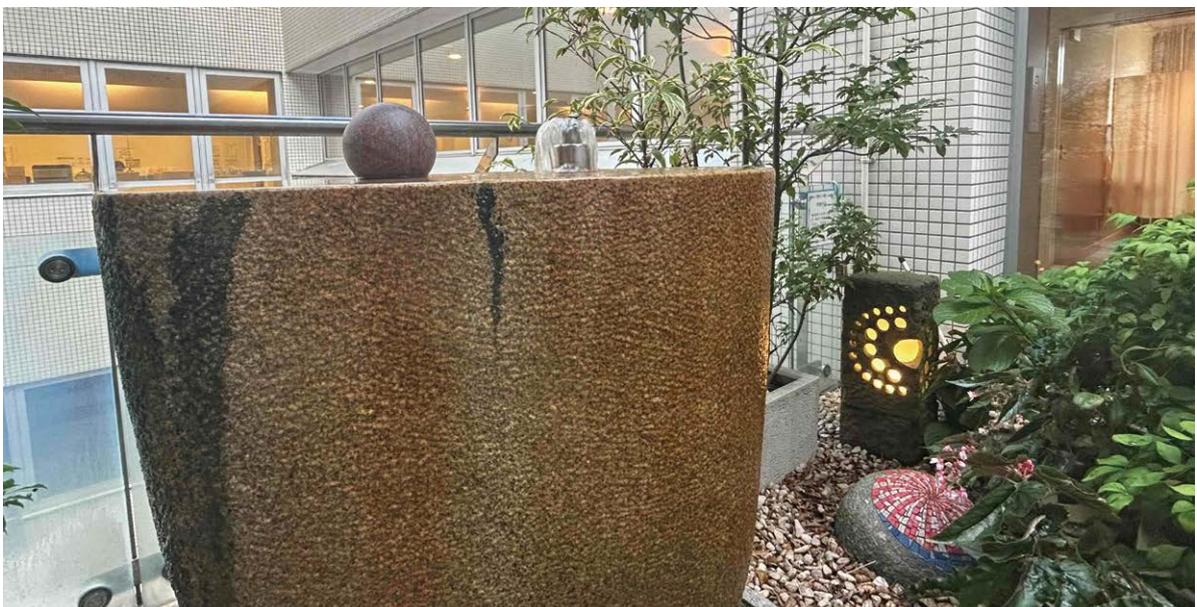
緩和ケアセンター長

安部 睦美

緩和ケア病棟 20周年を迎えて

2005年8月1日に松江圏域に初めて「光・風・水」をモットーに緩和ケア病棟が松江市立病院の新築移転に伴って開設されて20年…。病棟から見える田和山遺跡は今も変わらず、緩和ケア病棟を見守ってくれています。「病院で死ぬこと」の著者山崎章郎先生が訪れてくださったときに、「人は土にかえるんだよね、まさに市立病院の緩和ケア病棟では目の前の遺跡が人を最後まで見守ってくれてるね」と言われた言葉を思い出しています。20年、「緩和ケア」の分野も症状緩和のスキルは大きな進歩を遂げていると思います。しかし忘れてはいけないのが苦痛緩和に対する「手当て」でのあらゆる苦痛の緩和です。その「手当て」を一生懸命してくれるのが看護師をはじめとしたメディカルスタッフの方たちです。薬剤での鎮痛を図りながら「手当て」を患者さんに提供することで薬剤だけでとれる苦痛以上の苦痛が緩和されていることを日々感じながら患者さんと向き合っている毎日です。「足浴をしてもらって一日しんどいのが和らぎました」「手浴をしたら意識が少し出てきました」

「広いお部屋に変わるだけで気持ちが穏やかになりました」「アロマの香りで気持ちが楽になりました」などなど。またコロナ禍の中でも緩和ケア病棟はその役割を果たすことができました。「少しでも父のそばにいたことができて本当にうれしかったです」「最期を一緒に過ごすことができて本当にありがとうございました」とご遺族の方からいただいた言葉です。「寄り添うこと」がいかに大切かをコロナ禍では身をもって感じた次第です。コロナも5類になり十分ではありませんが普段の日常が戻ってきています。次の10年、20年、いろいろなことが起こるでしょう。しかし2005年に開設するときに掲げた「患者さん・ご家族と一日一日を大切に過ごすことのできる場所」としての緩和ケア病棟であり続けることができることを祈念しています。20年間を支えてくれたスタッフの皆さん本当にありがとう。そしてこれからも患者さん・ご家族の笑顔をたくさん見ることのできる緩和ケア病棟であり続けることができますように。



緩和ケア・ペインクリニック科
科長



中右 礼子

緩和ケア病棟20周年を迎えて

緩和ケア病棟20周年、おめでとうございます。私が緩和ケアを目指したのは、10年前になります。病院のホームページで緩和ケア医募集の記事をみて、安部先生へ電話でお願いして、半年間週に1回こちらで勉強させてもらいました。苦痛緩和が難しい患者さん、そばで不安いっぱいのご家族に、タイムリーに治療やケアを行うことの大切さを実感して、緩和医療イコール終末期医療ではないという見方も自然にできるようになったことを覚えています。

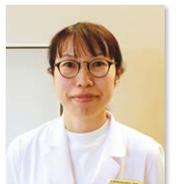
では、緩和ケアと一般病棟の違いは何かと考えてみますと、病気と闘ってきたところから、向き合い、寄り添い、むりのない様に過ごし方を変えていくところなのではないでしょうか。そのため、病状変化に対しても一対一対応ではなく、幾通りも選択肢を用意しながら、皆が納得いく方向、同じ方向に向かって進んでいくことが大切だと思います。

しかし、変化があると怖さや先々の不安がどうして

も出てきてしまいます。そこをどう乗り越えていくか、まだ答えは見つかりませんが、七年間一緒に指導してくださった岩下先生の姿を思い出しつつ考えてみたいと思います。普段スタッフとはにこやかに会話しながら、患者さん、ご家族と向き合われるときは物静かな面持ちで診療されていました。感情の浮き沈みが表に出ず、いつも私たちに安心感を与えて下さっていました。未来を見据えつつも、今を大切に生きる、そのヒントが先生の後ろ姿にあるのではないかと思います。

そして、チーム医療の大切さは、ここで学んだ一番の収穫だと思っています。当初、主担当で関わらせてもらい始めたとき、患者さんの希望とご家族の希望が違っているとき、どうすればよいかとても悩みました。まず迷ったら多職種でカンファレンスを、これが鉄則だと思います。これからも皆様に支えていただきながら、ここが療養の場として少しでも和らげる場所でありますよう、奮闘してまいりたいと思います。

緩和ケア・ペインクリニック科
病棟長



小糠 あや

20周年緩和ケアだより

私が、この松江市立病院の緩和ケア病棟で働かせてもらうようになって、早や2年が経ちました。この緩和ケア病棟はその十倍も時を重ねて来たのですね。本当にすごいことだと思います。

緩和ケア病棟で働き始めた頃は驚きの連続でした。私は長年、手術室で麻酔業務を行ってきたのですが、緩和ケアの仕事は全く異なるものでした。コミュニケーション能力、マネジメント能力、診断力、等々…とにかく様々なことが足りていないことを思い知らされる毎日でした。20年前に同門の安部先生と岩下先生がどのような想いでこの病棟を立ち上げ、どのような苦勞をして維持し続けて来たのだろうと…その偉大さに驚くばかりです。

緩和ケア病棟に来て印象的だったが、この病棟スタッフの明るさでした。とにかく賑やかで、とにかくおしゃべりなのです。緩和ケア病棟はもっと静かで厳かで…と勝手なイメージを持っていたのですが、

全く違いました。ナースステーションはもちろん、病室やラウンジや至るところから明るい笑い声が聞こえてきます。そしてたくさんの職種のスタッフが垣根なくコミュニケーションを取り合っています。そして、この良好な関係性はカンファレンスや日々の診療で遺憾なく発揮されます。患者さんの小さな変化や想い、ご家族の複雑な想いや関係性など、あらゆる情報を共有し、日々の診療やケアに生かされます。またスタッフの悩みや疑問を共有し、改善するべく意見を出し合い助け合います。

緩和ケア病棟が長年培ってきたこの温かく明るい雰囲気は、不安な療養の中におられる患者さんやご家族にとって安心できる環境作りに欠かせません。またスタッフの健全な働く環境作りにも欠かせません。この松江市立病院の緩和ケア病棟が今後10年、20年と続いていけるように、私も毎日笑顔でお手伝いできればと思います。

今・思うこと

松江市立病院が田和山に移転して、20年が過ぎます。私は20年前、灘町の旧市立病院から緩和ケア病棟に配属となり、病棟スタッフとして新しい病院で患者さんを受け入れる立場でした。はじめて受け持たせていただいた患者さんは70代の患者さんでした。緩和ケアの研修は受けていたものの、実際はどう関わっていけばいいのか、いろいろ迷いながら関わった記憶があります。また当時の私と同世代の女性の患者さんの受け持ちだったことは今でも忘れられません。世代が一緒ということ、同じ女性ということ、私の方が緊張していたのかもしれませんが。日々お部屋に挨拶に行く度にその患者さんは、私とは目を合わせてはもらえず、必要以外のことは話されませんでした。でも毎日、毎日勤務のたびに部屋に伺う内に、ある日笑顔で

看護師長
和田 祥恵



笑って私の話を聞いてくれました。私の方がびっくりして、その数日後に、思い切って「いつもと違う感じがしますが、何かありましたか？」と聞いてみました。少し微笑んでから「特に何もないよ…」と言われました。私はその笑顔にとてもいやされた記憶があります。あるときは、20代の女性の患者さんを受け持ちました。何が正解でどうすることが彼女のためだったのかと今でも自問自答しています。

緩和ケア病棟で勤務した期間に出会った多くの患者さんから、とても大事な事を伝えてもらったと思います。「寄り添う」ということは一言では言い表せないし、何が正しいのかもわからないけれど、マニュアルにはない、自分自身を磨いていくことなのではないかと感じています。

副看護師長

井原 真利子



1日の中でも、ふっと笑顔になったり、心が安らぐそのような場であることを目指し、日々看護しています。患者さん、ご家族、そしてここにたずさわる方々が、心穏やかに過ごせますよう、これからも頑張ります^^

副看護師長

森脇 茜



緩和ケア病棟20周年おめでとうございます。患者さんご家族をはじめ、緩和ケア病棟スタッフが紡いでこられた歴史と想いを感じています。これからも心の拠り所となる病棟であり続けますように。私も頑張ります。

スタッフからの メッセージ

20年の道のりには、きっと笑顔も涙もたくさんあったと思います。患者さんやご家族の気持ちにそっと寄り添って、心暖まるケアを届けてきた皆さまに、尊敬と感謝の気持ちでいっぱいです。病棟のみなさんが作りだす“ほっとする空気”は陽だまりのようです。これからも、患者さんご家族、そしてスタッフの“ホッとできる場所”として続いていくことを願っています。20年分の「ありがとう」と、これからの日々「楽しみ」を込めて。

がん看護専門看護師 米村 智子

緩和ケア病棟設立20周年おめでとうございます。
これから先も患者さん・ご家族との1日1日を大切にできる病棟でありたいと思っています。

看護師 岡田 裕一郎

多くのスタッフで今まで作り上げてきた緩和ケア病棟20周年の節目に、私も一緒に携われることを本当にうれしく思います。これからも緩和ケアチームの一員として緩和ケアのせいしんをつないで行きたいと思っています。

看護師 壺倉 由子

20周年おめでとうございます。これからも患者さん・ご家族が安心して療養できる病棟であることを願っています。

看護師 宮廻 潤平

患者さん、ご家族に寄り添い、安心できる病棟であり続けたいと思っています。

看護師 角田 優子

20周年おめでとうございます。これからも、患者さん・そのご家族のみな様が穏やかで温かい日々を送れる様お手伝いしていきたいと思っています。

看護師 井上 真由美

20周年おめでとうございます。
患者さん、ご家族と一緒に1日1日を大切に過ごしていきたいと思っています。これからも患者さん、ご家族にとって居心地の良い病棟でありますように。

看護師 園山 美歩

20周年おめでとうございます！

私が緩和ケア病棟に配属となったのが2014年…あれから10年以上の時間が流れたのだと思うととても感慨深いです。これからも患者さん、ご家族と時に泣き、笑い一緒に怒り、哀しみ…喜怒哀楽の感情を大切にしながら療養への支援をしていきたいと思っています。

看護師 松浦 香穂里

これからも患者さん・ご家族の方が安心して、穏やかに過ごすことができる病棟でありますように。

看護師 平野 優子

20周年おめでとうございます。大切な節目をお祝いできたことをとてもうれしく思います。沢山の患者さん、ご家族、病棟スタッフの皆さんとの出会い、ご縁に感謝します。これからも安心できる場であり続けることを願っています。

看護師 石原 典子

20周年おめでとうございます。これからも患者さん、ご家族にとって過ごしやすい病棟になるようお手伝いしたいと思っています。

看護師 西尾 由紀子

20周年おめでとうございます。これからも皆様にとって大切な場所であり続けられますように…

看護師 玉木 香織

20周年おめでとうございます。緩和ケア病棟で共に過ごす患者さん・ご家族の1日1日を最高のスタッフと全力でサポートできるように学び続けていけたらと思っています。

看護師 渡部 貴江

20周年おめでとうございます。これからも、患者さん、ご家族の心身共に安らぎ、笑顔あふれるあたたかな療養の場であり続けることを願っています。

看護師 金津 久美子

これからも患者さんとご家族の療養の支えとなれる病棟でありますように。1つ1つの出会いを大切にしていきます。

看護師 原 由希

20周年おめでとうございます。これからも患者さん一人ひとりがその人らしく過ごせるよう力になればと思います。

看護師 佐々木 麻希

20周年おめでとうございます。これからも素敵な温かい病棟であることを願っております。

看護師 福島 祐香

患者さん、ご家族との出会いを大切に、日々穏やかに過ごせるよう願っています。これからも笑顔あふれる病棟でありますように。

看護師 濱坂 志保

20周年おめでとうございます！“緩和ケア”に興味をもったのは、私が看護学生で受け持たせていただいた患者さんがきっかけです。あの頃の想いは変わらず、これからも頑張っていきます!!

看護師 平井 浩美

20周年おめでとうございます。これからも患者さん、ご家族にとって過ごしやすい病棟であることを願っています。

看護師 藤原 真亜子

20周年おめでとうございます。患者さんやご家族の皆様が少しでも気持ちよく過ごしていただけるようお手伝いさせていただければと思っています。

看護助手 金田 真理子

20周年おめでとうございます。これからも過ごしやすく笑顔がいっぱいの病棟になるように祈ってます。

看護助手 錦織 恩姫

20周年おめでとうございます。患者さんやご家族の方が少しでも良い時間を過ごしていただけるようお手伝いできればうれしいです。これからもよろしくお願いします。

看護助手 吉川 しのぶ

緩和ケア病棟開設20周年おめでとうございます。私が病棟担当となって15年。チームワーク良い病棟スタッフやボランティアの皆さんに支えられ、「食」を通して、患者さんやご家族から多くのことを学びました。

「食べることは生きること」。患者さん一人一人の「食」と向き合い、「美味しい」という笑顔が増えるよう、これからもフットワーク軽く頑張ります。愛情あふれる緩和ケア病棟が、ますます発展し30周年、40周年を迎えられることを祈っています。

管理栄養士 森山 純子

20周年おめでとうございます！これからも笑顔でお手伝いをさせていただきたいと思えます。

ボランティアスタッフ一同

緩和ケア病棟の歩みとともに、様々な出会いと別れを体験し、退院調整をはじめ相談員として関わらせていただきました。その中で退院された時の患者さんやその家族の笑顔、生き抜く姿勢や人と人の絆が思い出され、今の私の基盤となっています。

緩和ケア病棟のゴールは病棟で最期を過ごすことではありません。いろいろな選択肢があり、「帰りたい」「帰りたいけど家族に迷惑かけたくない」「帰らせてあげたいけど不安」等それぞれの葛藤の中にある皆様の意向を汲み取りながら、住み慣れた我が家で家族と共に過ごせる日々につくよう今後も関わっていきたくと思います。また緩和ケア病棟を取り巻く状況も大きく変化しました。症状緩和をしながら地域に繋いでいけるよう今後も関係機関との連携し、継ぎ目のない福祉サービスを提供できるよう努力し続けますのでよろしく御願い致します。

20周年のお祝いとともに今後の緩和ケア病棟のご活躍を祈念いたします。

相談員 來海 薫

緩和ケア病棟も私も20周年の今年、初めて病棟担当として勤務しております。声大きいことと元気なことがアピールポイントの私は、ほかのスタッフや患者さんお一人お一人に支えてもらい、毎日有意義にこの病棟で働いています。私のアピールポイントが少しでも入院されている患者さんやご家族の支えや力になれるよう、これからもがんばります。

作業療法士 金山 栄理子

20周年おめでとうございます。これからも変わらず、心温まる、穏やかに過ごせる緩和ケア病棟であり続けることを願っています。

クラーク 後藤 真弓

父が東京のがんセンターに入院している時、屋上でフルートの練習をしていたらいつの間にか後ろで男性の患者さんが聴いていました。

「久しぶりにいい気分になりました。ありがとう」その言葉に心を揺さぶられ、あれから「生活の中の音楽(音)」を一緒に探しながら、患者さんとご家族に関わらせていただいています。

今までの20周年に、これからは、そしてすべてに感謝。「同行二人」の想いも携えて。

音楽療法士 西 紫

母ががんで闘病していたこと、それが緩和ケアに携わりたと思ったきっかけでした。現在は緩和ケア病棟を担当し、ちょうど1年となりました。

患者さん、ご家族にとって安らぐことのできる病棟になるよう頑張りますので今後もよろしくお願いいたします。

薬剤師 門内 優香里

桃の節句

令和7年3月6日(木)

今回のひな祭りでは、桃の妖精(妖怪)が出現しました！
暖かったので、桃の開花も早かったようですね。



みんなで歌いました



桃の妖精…だそうです…妖怪じゃなくて？



盛会に終わりました！



美味しそう〜



今年も雛段飾りの出番

花見

令和7年4月3日(木)

今年もきれいに桜の花が咲きました。みんなでお花見に出かけました。
しっかりと目の保養をした後は…やっぱり花より団子ですね！



今年の桜もきれいです



桜とお雛様のコラボレーション



青空にピンクが映えます

端午の節句

令和7年5月15日(木)

金太郎や富士山らとスタッキングバトルを行いました！富士山がさすがの一番でした！
安部先生のハーモニカも素敵でしたよ〜♪



ボランティアさん作成♪



みんなで歌います！



安部先生のハーモニカに聴き入る金太郎



美味しそうな葛餠頭



誰が一番になるか？！

七夕

令和7年7月10日(木)

師長お得意の仮装はアメリカンドッグでした。

そして今回はフラダンスの皆様にお越しいただきました！とても素敵な音楽とダンスに、みんな癒されました！



フラダンスに癒されます



メイク落としまーす！



夏野菜



織姫と彦星



素敵なダンスをありがとうございました。



願い事、届いたかなあ。

水郷祭

令和7年8月2日(土)

今年も松江水郷祭はすごかった！

屋上からはすべてがとてもよく見えました。湖面を彩る大輪の花火。心に刻まれました。



夜空いっぱいの花火



今年もよく見えました



かき氷とのコラボ

徒然日記



患者さんご自慢の
本場ロシアのマトリョーシカ



テイルームからの夕焼け



研修医の先生がスイートポテトを
作ってくれました!



ピアノの大修理!
初めて中身見た!



野の花も生け方で
こんなにオシャレ



みんなで多肉の
寄せ植えしました



春の訪れ



きれいなつばきが咲きました!

編集後記

とうとう20周年記念号となりました。

病棟開設から20年、長かったなあ、と思うと同時にあっという間だったような気もします。

長くもあっという間の月日。以前何かの投稿で、90代の方々がおっしゃった深い言葉があります。

「1日は長い。だが90年はあっという間だ。」

子供のころ、1日は長く、1年なんて本当に気の遠くなるような時間だったのに、大人になると1年のなんと早いことか。考えてみれば、子供のころの1年は例えば5歳であれば5ぶんの1なわけで、大人になればその年齢ぶんの1になるのでそりゃあ5歳の時より早く感じるのは当たり前なのですが、人生ようやく少しわかりはじめたかな、と思う頃にはもうこの世とはおさらばしなくてはならないわけです。

人生の意味とか価値とか、考えても答えはない禅問答のようなものですが、時々こういった考えが巡るのも年齢を重ねたゆえでしょう。それでも、結局子供のころや若い頃と大して何も変わらず、このままあの世に行く前にもれなく後悔するのだろうか、と思ったりします。

なんだか取り留めなくなりましたが、20周年という過去を振り返るにあたり、今を見つめなおしながら、もう少し、皆様のご協力を仰ぎながらこのおたよりを作成していきたいと思います。

西 紫

編集
委員会

編集長：安部 睦美
編集・校正：安部 睦美、和田 祥恵
編集・写真：西 紫

令和7年9月 発行

松江市立病院 緩和ケア病棟

〒690-8509 島根県松江市乃白町32-1

TEL：0852-60-8000（代表）／FAX：0852-60-8005（総務）



松江市立病院
MATSUE CITY HOSPITAL